

第38回電気通信普及財団賞

テレコム学際研究部門 総評

第38回テレコム学際研究賞、テレコム学際研究学生賞に多数のご応募をいただき有難うございました。

テレコム学際研究部門は2021年度に創設されましたので、今年度で2回目の募集になります。本賞には25件（昨年度34件）の応募がございましたが、学生賞への応募はわずか1件（昨年度9件）でした。作品内容を評価するテレコム学際研究賞における応募作品の発表形態と著者の所属、学生個人の功績を評価するテレコム学際研究学生賞における応募作品の発表形態と候補者の執筆時の学年は、別表（2～3頁参照）のとおりでした。審査は、テレコム人文学・社会科学（以下、人文学・社会科学）やテレコムシステム技術（以下、技術）に関する従来からの部門と同様に、ピアレビューに基づく予備審査と表彰専門部会における本審査の2段階から構成されております。

テレコム学際研究賞に関しては、予備審査の結果をもとに11件が本審査に進み、入賞3作品、奨励賞2作品、特例表彰1作品を選定しました。この特例表彰ですが、募集要項に特例表彰の記載はなく、「情報通信に関する研究論文・著作等」を対象とすると書かれています。今回、特例表彰に選定した作品は複数の筆者が、それぞれの専門分野の立場から執筆した原稿をまとめた解説記事であり、募集要項に記載された対象作品に該当するか否かが議論になりました。審議の結果、研究成果を必ずしも記載した作品ではないが、学際研究を推進する内容を含む点を評価し、特例表彰としました。特例表彰の位置づけに関しては引き続き検討する必要があると認識しております。テレコム学際研究部門に関しては創設2年目ということもあり、確固たる一貫性が確立されていないことは事実であります。表彰専門部会委員（以下、委員）の間で活発な意見交換を実施しており、その概要は後半部で記載します。

一方、応募数1件のテレコム学際研究学生賞に関しては、予備審査の結果をもとに当該応募作品を本審査の対象としました。応募数が1件のみという想定外の状況を配慮して、さまざまな対応を検討しました。結論として人文学・社会科学部門と技術部門の学生賞に応募された作品の中に、テレコム学際研究学生賞における審査の方が相応しい作品があるか否かを検討することとしました。技術学生賞へ応募された2件の作品がテレコム学際研究学生賞における表彰の候補にあがり厳正な審査に加えて、また応募者に意向を伺った結果として、入賞2作品、奨励賞1作品を選定いたしました。

電気通信普及財団賞では、学際研究分野を人文学・社会科学分野と技術分野の両分野にわたる研究に位置付けております。誕生したばかりのテレコム学際研究賞とテレコム学際研究学生賞に対して多数の応募を獲得すべく、2022年度の募集要項では「テレコム学際研究賞は、人文学・社会科学賞やシステム技術賞には応募しづらい中間領域のテーマや、技術の社会実装における政策課題、社会的に認知されていない課題を問題提起するような研究テーマ」と定義し、昨年度を受賞作品を紹介いたしました。また、さまざまな媒体を介して積極的な発信を繰り返しました。

応募要領における記載の拡充や活発なプロモーション活動にもかかわらず、2022年度の学生賞に対する応募が1件であったという状況を鑑み、表彰専門部会委員の間で議論を交わしました。

別添1（4頁参照）の「委員個々が考える電気通信普及財団賞における学際研究」は委員の考えを箇条書きで記載したものであり、意見の集約を図ったものではありません。現在のところ、委員は個人の判断のもとに学際研究を定義し、応募作品を評価しております。個人的な考えですが、一つの方向性を定めることは困難であると思われまます。今後とも学際研究は多様性を許容する研究として、位置づけることが望ましいと考えます。

2022年度にテレコム学際研究賞に応募があった作品に関するキーワードを別添2（4頁下参照）の「応募論文におけるキーワード」として掲載しました。キーワードは多彩であり、さまざまな分野の研究が応募されていることがわかります。来年度（2023年度）の学際研究部門への応募の参考になれば幸いです。

最後に、テレコム学際研究賞ならびにテレコム学際研究学生賞が広く認知され、今後、多数の作品が応募されることを期待しています。

■テレコム学際研究賞

◆発行種別

発行種別	応募数	本審査	授賞数
海外学会誌	11	5	入賞1件 奨励賞1
国内学会誌	8	4	入賞1件 奨励賞1件 特例表彰1件
国際会議	5	2	入賞1件
書籍	1		
合計	25	11	6

◆著者の所属

研究分野	応募数	本審査	授賞数
大学	15	4	奨励賞 2 件
テレコム企業（研究所含む）	2	1	
大学＋研究機関	2	1	入賞 1 件
研究機関	1	1	入賞 1 件
大学＋テレコム企業（研究所含む）	1	1	
大学＋メーカー（研究所含む）	1	1	
大学＋テレコム企業＋メーカー（研究所含む）	1	1	入賞 1 件
その他	2	1	特例表彰 1 件
合計	25	11	6

■テレコム学際研究学生賞

◆発行種別

発行種別	応募数	本審査（※1）	授賞数（※1）
国際会議	1	2	入賞 1 件
海外学会誌	0	1	入賞 1 件 奨励賞 1 件
合計	1	3	3

◆候補者の学年

研究分野	応募数	本審査（※1）	授賞数（※1）
大学院修士課程	1	2	入賞 1 件 奨励賞 1 件
大学院博士後期課程		1	入賞 1 件
合計	1	3	3

（※1） 学際研究部門における再審査の対象となった、技術研究部門からの 2 作品を含む。

(別添1) 「委員個々が考える電気通信普及財団賞における学際研究」 順不同

- 明確な目的を有する社会展開を目指した既存の情報通信技術の融合に関する研究
- 情報通信技術の社会実装（サービス）に対する人文・社会科学的な研究
- 何らかの人文・社会科学的な観点をもった情報通信技術の研究
- 情報通信関連技術を利用した人文・社会科学的な研究
- 情報通信技術に立脚し、社会的価値創造（学術的な貢献に加え、経済的、社会生活の利便性、産業、政策等）を行う研究
- 情報通信についての理系と文系の両分野にわたる研究
- 複数の研究者が専門知を提供しあい、それらの共創と融合により、これまでの社会のあり方を大きく変革・転換させることを先導するような研究
- 既存の学問分野・体系の中での理論展開であってはならず、人文社会科学分野、自然科学分野を跨る研究。但し、複数の学問分野の関係する論文が、互いに有機的に関連することなく、並列的に並べられているものであってはならない。
- 革新的・創造的な研究であり、その研究の波及効果が人文社会科学・自然科学という既成の枠を超えるものであることが望ましい。
- 現在の募集要項における学際研究の定義を拡大して、「テレコム学際研究賞は、人文科学・社会科学とシステム技術の両分野にまたがるテーマ、具体的には、社会的な課題を技術の視点から解決しようとする研究テーマ、技術の社会実装における課題を論じるテーマの募集を期待するところです。」とする。
- 現在の募集要項における要件に関して、論文、著作物のみではなく、サービスや起業、特許、標準といったものも表彰の対象とする。

(別添2) 「応募論文におけるキーワード」

順不同

ダークウェブ、個人情報保護、労働法、就労者保護、文章解釈、認知科学、COVID-19、報道分析、株価、顧客満足度、サイバーセキュリティ、フェイクメディア、行為主体感、音楽発掘、ウェブサービス、小論文自動採点、オンラインマッチング、トンネル掘削、運動学習、神経科学、対人接触、在宅勤務、メンタルヘルス、ソーシャルディスタンス